観音菩薩の宗教 ⑥

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

衆生の恐怖からの救い

お寺で生まれ育ったにもかかわらず、私は幼いころ、ことさら幽霊やお化けが恐かった。良かれと思って叔母がお土産にくれたラフカディオ・ハーンの『怪談』を読むことはおろか、しまった本棚の前すら通れなくなったほどであった。遊びに夢中できちんと食事をせず、父に叱られて「ご飯をちゃんと食べないとこうなるぞ」と見せられたガンダーラ彫刻の「ブッダ苦行像」には、窪んだ眼窩と浮き上がった肋骨が恐ろしくて、掘り炬燵にもぐりこんでしまった。それでも骸骨のごときブッダの姿が目に焼き付いて離れなかったことを覚えている。

善財童子（鎌倉時代　快慶作　国宝）
写真提供：安倍文殊院

こうした体験にもとづいているのかは定かでないが、恐がりやを脱してからも人間の恐怖心は私の関心を捉えてやまなかった。やがてラフカディオ・ハーンの「耳なし芳一」や「雪女」を英文で楽しめるようになり、古文に通じてくると江戸時代の鶴屋南北の『東海道四谷怪談』や上田秋成の『雨月物語』を味読した。落語の怪談咄では「真景累ケ淵」や「牡丹灯籠」でイメージをふくらませた。さらには日本のホラー映画の『呪怨』とそのアメリカでのリメーク版『Grudge』を見比べて、日本版ではほとんど姿を見せぬ呪いが、リメイク版ではおどろおどろしい姿で現れることから、日本人は心理的な恐怖に怯え、アメリカ人は物理的な恐怖に慄くことを指摘したりもした。同様なことは、日本人には身の毛もよだつ月岡芳年の幽霊画「宿場女郎図」や「産女」が、私の受講生の欧米の留学生にはピンと来ないことにも見出された。東西の怪奇譚を見比べていくと、日本の幽霊は静かに恨みや悲しみを湛え、観るものに心理的な恐怖を与えるものの多いことも浮かび上がって来る。日本人は怨念や執念、愛念といった、悲しみや憎悪、後悔が念として強く残る精神的なものに恐怖を感じ、欧米人は物理的に襲ってくる肉体的なものに怯えるという傾向があるのではないか。番町皿屋敷の「お菊の皿」や「牡丹灯籠」の静けさと、「エクソシスト」や「ポルターガイスト」の騒がしさは両者の違いの典型であろう。そんなことを考えてきた。

数年前、こうしたことを私が授業で話したところ、アメリカ人の女子学生が「アメリカ人は常に何かに怯えて暮らしている」として、彼女がインターネットで見つけた「アメリカ人の恐怖の一覧」のデータを転送してくれた。その一部を摘記すれば、二〇〇〇年の「二千年問題がコンピュータを攪乱して我々を殺す」に始まり、二〇〇一年には「炭疽菌が我々を殺す」と恐怖が続き、西ナイル・ウイルス、大量破壊兵器、SARS、鳥インフルエンザや不景気、北朝鮮、エボラ出血熱などが年ごとに列挙され、それらがアメリカ人を殺すとする。これらのことは日本人も報道を通じて知ることばかりだが、そのサイトによればアメリカ人は最大の経済大国で軍事大国であるにもかかわらず、すべてに対して震え慄いているという。学問的サイトではないものの、そのリストはアメリカ社会や心理の一端を示していて興味深い。

前置きが長くなった。以上のように古今東西の宗教や芸術、我々の幼児体験などを考えると、人間にとって恐怖とは根源的な感情であることがわかる。門外漢ながら大脳生理学の所説を見ると、大脳辺縁系の深くにある扁桃体は恐れや不安をつ

かさどり、個体の安全を確保することにも貢献しているとされ、恐怖がなければ生物にとって生命維持は困難になるという。人間は、そうした生物としての恐怖を文化として種々の形で表現したり感じたりし、それに対し多様に対応してきた。仏教による恐怖や苦難の表現と対策は、そのひとつである。なかでも観音菩薩が苦難から救ってくださるとする信仰は、弘く流布し多くに受け入れられている。

『法華経』の第二十五章を飾る『観音経』は、そうした観音信仰の重要な根拠のひとつとなったが、ここではまず『華厳経』の最終章に当たる「入法界品」に説かれた観音菩薩を見てみよう。『観音経』に先んじて「入法界品」を見るのは、観音菩薩が衆生の「怖」すなわち恐怖から救ってくださるとあるからである。それにより、上述した人間の恐怖と観音信仰を結びつけて考察したい。

「入法界品」は善財童子という少年が悟りを求めて五十三人の善知識すなわち仏道の師を訪ね巡り、おのおのから仏教の教えを聞いて最後に悟りを得るまでを描いている。このうち二十七番目に訪れるのが補陀落山に住まう観音菩薩である。観音菩薩は善財童子に対し、大慈悲の心から自らが衆生済度のため、あらゆる姿となって「一切の恐怖」を取り除くことを説いた。

「入法界品」には、その「怖」が以下のごとく十八項目にわたって挙げられている。すなわち、険道怖・熱悩怖・迷惑怖・緊縛怖・殺害怖・貧窮怖・不活怖・悪名怖・死怖・大衆怖・悪趣怖・黒闇怖・遷移怖・愛別怖・怨會怖・逼迫身怖・逼迫心怖・憂悲怖である（實叉難陀訳『大方廣佛華厳経』）。「怖」は、佛馱跋陀羅の訳では「恐怖」となっている。「入法界品」のサンスクリット語原典『ガンダヴィユーハ・スートラ』に見える「怖」「恐怖」の原語は「バヤ（bhaya）」で、怖れとか強い不安の心を表す。今回、十八項目すべてを説明する紙幅はないが、いずれも心と身体に起こるあらゆる怖れ、命にかかわる不安などである。これが観音菩薩の慈悲に基づく大きな救済力を説くことはいうまでもないが、同時にこの経典が何を以て恐怖と捉えたかも示している。

鳩摩羅什が訳した『観音経』の偈文は、流れるような五言の韻律で暗唱しやすく、なかでも「念彼観音力」は多くの人の耳に残る。「念彼観音力」は「彼の観音力を念ずれば」と読め、それに続き解決されるべき困難の具体例が列挙される。『観音経』の偈に「念彼観音力」は十三回も繰り返され、それは観音菩薩が十三種の苦難、恐怖を解決してくださることを意味している。それを整理したのが七難三毒難である。

人間にとって根源的な感情である恐怖からの救いを説くことは、観音菩薩の人気の最大の根拠となった。傑出した大乗経典の『華厳経』と『法華経』が観音菩薩の救済力を説いたことも、観音信仰の弘まりに寄与したことは間違いない。

次回は経典の説く「怖」や「難」や「毒」をさらに考察していきたい。

院内散歩 ⑰

～薬王院の展示物～

木版画『梅雨の大杉原』
作・井堂雅夫